

ワクワク箱根温泉

第 9 回

「小涌谷温泉」

菊川城司

(神奈川県温泉地学研究所)

■はじめに

箱根火山のめぐみによって生まれた箱根温泉について、シリーズで紹介する 9 回目です。今回は、箱根二十湯のうち、小涌谷温泉のおはなしです。

小涌谷温泉は、箱根登山鉄道の小涌谷駅付近から国道 1 号線に沿って箱根恵明学園の先の笛塚辺りまでの



写真 1 上空から見た小涌谷温泉付近。写真中央から左上にかけてが小涌谷温泉です。(2005 年春、原田昌武氏撮影。)

比較的範囲の広い温泉場です。

小涌谷は早雲山と丸山の間に位置しています。小涌谷から蛇骨川に流れる車沢に沿って温泉の開発が進んできましたが、笛塚方面にも源泉が

掘削されるようになり、比較的範囲の広い温泉場となっています(図 1、写真 1、写真 2)。

ところで、小涌谷温泉は何と読むのかご存じでしょうか？小涌谷の読み方は、本来“こわくだに”であり、住所表示の読み方も同様です。ところが、箱根登山鉄道の駅名は“こわきだに”と読みます。また、温泉レジャー施設で有名な小涌園も“こわきえん”です。このややこしい現象は、“こわき”と読む駅や施設の名称が広まるにつれ“こわきだに”という言い方が一般的に広まってきたためだと言われています。小涌谷温泉は、住所が神奈川県足柄下郡箱根町小涌谷の温泉の総称ですので、“こわくだにおんせん”と読むのが正解です。

小涌谷温泉とは具体的にどこのエリアを指すのかについても、ちょっとややこしい話になります。「温泉場」の定義は法律などで決まったものではありませんので、人々の考え方や時代の変遷と共に変わることがあります。また、地面はつながって

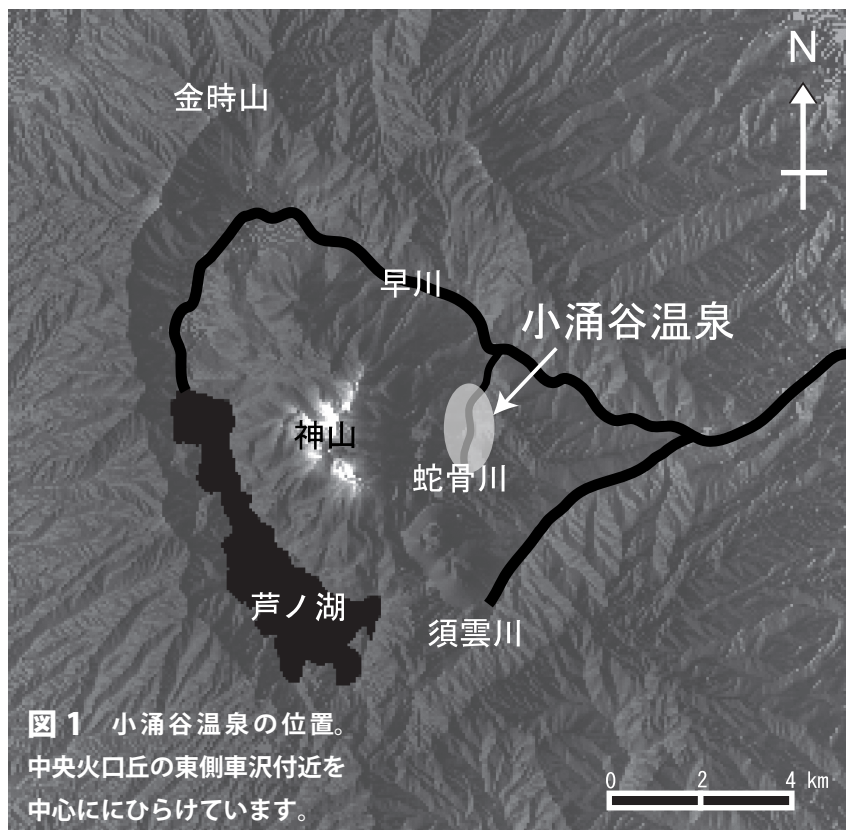


図 1 小涌谷温泉の位置。中央火口丘の東側車沢付近を中心にひらけています。

いるのでどこからどこまでが〇〇温泉と線引きするのが難しいケースも多々あります。小涌谷という土地の成り立ちを考えた場合は、過去に噴気が見られた車沢治いの温泉（一部の住所は二ノ平）を小涌谷温泉エリアと考えることができます。しかしながら、ここでは現在の住居表示に基づいて、所在地が小涌谷の源泉と温泉利用施設を小涌谷温泉として紹介することにしましょう。

■小涌谷温泉の歴史

小涌谷という名称は、大涌谷に対する小さな噴気地帯という意味で付けられています。かつて大涌谷が「大地獄」と呼ばれていたときは小地獄と呼ばれていました。しかし、明治天皇、皇后の行幸に際して地獄という名称は縁起が悪いということで、1873（明治6）年に「底倉村字小地獄」から「底倉村字小涌谷」に改

写真2 上空から見た中央火口丘付近。正面の噴気地帯が早雲山、左下隅から上部に向かって神山へ延びている小さな谷が小涌谷です。



称されました（図2）。

ちなみに、小涌谷が改称当時到现在していた底倉村は、1889（明治22）年に大平台村と併合して温泉村となり、さらに1956（昭和31）年に湯本町などと合併して現在の箱根町となっています。

1811（文化8）年に発行された箱根七湯の枝折の六ノ巻底倉ノ部には、小地獄のことが紹介されています。そこには「・・・地一めんに熱し巖の間より泥湯玉ぎりにゆる所都テ十四五所中にも至ってつよくにゆる所二ヶ処あり清左エ門ちこくといふ其外餅や紺や酒や等の名ありて地氣少しづつたがひて涌所の泥湯色異なり・・・」と書かれており、当時は多数の泥湯（いわゆる坊主地獄）があり噴気活動が活発だったことが判ります。

小涌谷温泉は、明治10年代に、三河屋旅館が噴気地帯である小地獄から引き湯をしたことが始まりだと伝えられています。当時から現在まで利用されている源泉には、明治の湯（写真3）や大正の湯などがあります。

また、三河屋旅館の創業者である榎本恭三氏は、大正時代に、蛇骨川上流に位置する千条の滝周辺を整備しました。その甲斐があつて滝の周辺は大変な賑わいを見せるようになったと伝えられています。千条の滝は、幅20m、高さ3mの滝で、水が幾筋もの糸状になって流れ落ちていることからこの名前が付けられ

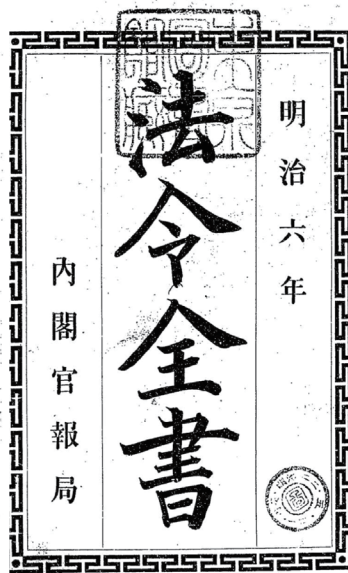
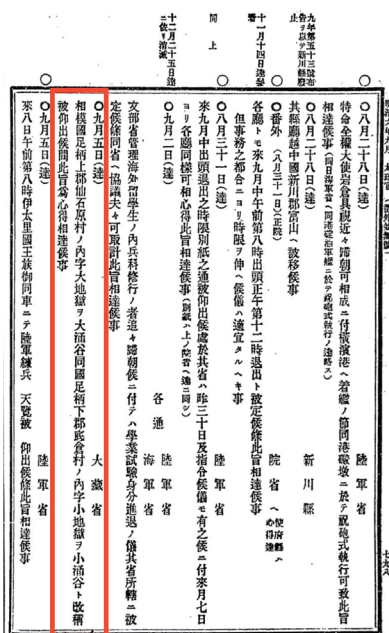


図2 小地獄から小涌谷への名称変更を伝える明治6年の太政官達。「太政官達 番外並無號 明治六年九月五日 相模國足柄上郡仙石原村ノ内字大地獄ヲ大涌谷同國足柄下郡底倉村ノ内字小地獄ヲ小涌谷ト改稱仰出候間比旨爲心得相達候事」と書かれています。（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/> から引用）

写真 3 現在の明治の湯。今でも三河屋旅館の源泉として利用されています。



写真 4 千条の滝。周辺を山や川に囲まれた閑静な場所で流れ落ちていきます。



ました（写真 4、写真 5）。

大正時代には、小涌谷に財閥の別荘が次々に建てられていきましたが、小涌谷温泉が大きく発展するのは、1948（昭和 23）年、小涌園が旅館営業の許可を受けて以降です。当時は三河屋旅館だけにしか温泉はなく、小涌谷で掘削しても温泉は出ないと言われていましたが、1949（昭和 24）年に蒸気井の掘削に成功し、その後も積極的に火山性蒸気を利用することによって、小涌園は箱根最大の温泉レジャー施設となりました。

なお、箱根小涌園で利用されている蒸気井の所在地は箱根町二ノ平であり、温泉台帳番号も宮城野第〇〇号となります。（所在地が箱根町小涌谷の温泉は、台帳番号が温泉村〇〇号となります。）これらの蒸気井は、温泉台帳を管轄する小田原保健福祉事務所温泉課の区分に基づいて、本連載では二ノ平温泉として扱うことにします。

■小涌谷温泉の現状

小涌谷の噴気は昭和 25 年頃に見られなくなったといわれており、今



写真 5 千条の滝。滝の水は、箱根火山の土石流堆積物である角の取れた丸い石（円礫岩）が積み重なった上から流れ落ちています。

の小涌谷温泉には噴気地帯はありません。しかしながら、火山活動の影響が比較的大きいエリアに位置するので、箱根の中でも高温の温泉が湧出する地域となっています（写真 6）。

2016（平成 28）年 3 月末現在、箱根温泉の源泉は全部で 345 ケ所

写真 6 国道 1 号線沿いの源泉。源泉から温泉を出すと、高温のために周辺に真っ白な蒸気が立ちこめます。



ですが、小涌谷温泉にはその約 6% にあたる 22 源泉があります(図 3)。また、小涌谷温泉にある宿泊施設は 17 軒、公衆浴場は 2 軒です。

2007(平成 19)～2008(平成 20)年に小涌谷温泉の 21 源泉で行われた調査結果の平均値では、温度は 62.8℃、揚湯量は 1 分間に 83 リットル、pH は 8.2 でした(表 1)。過去に噴気が見られたエリアであることもあり、非常に高温で蒸気混じりの温泉が湧き出す源泉もあります(写真 7)。

■小涌谷温泉の泉質

小涌谷温泉の主な泉質は、ナトリウム―塩化物泉と単純温泉です。温泉に溶けている成分の総計は 300～3000mg/kg 程度で、高温の温泉ほど成分が多くなる傾向があります。90℃を超える源泉では、含まれる塩化ナトリウム(食塩)の量が温泉 1 リットル当たり 2g 程度になります。

小涌谷温泉の主要な成分であるナトリウムイオンと塩化物イオンは、小涌谷付近の地下から上昇してくる

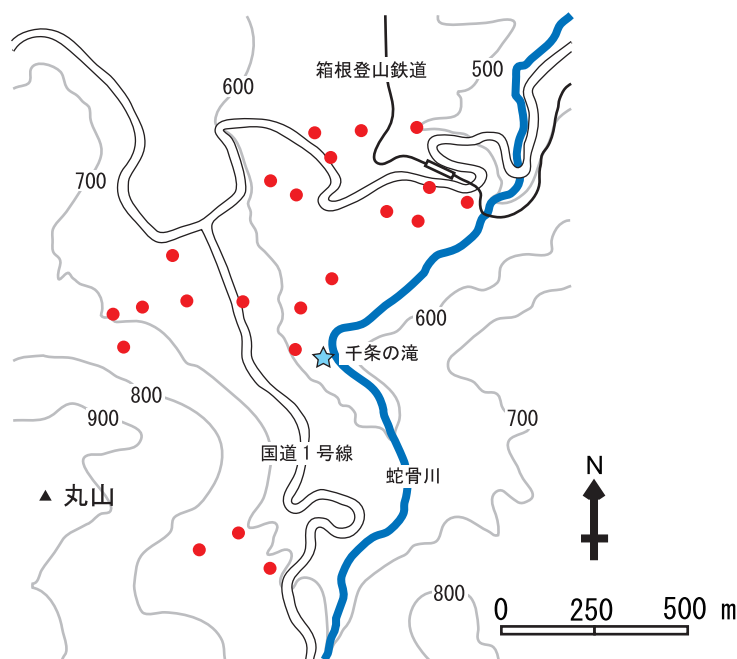


図 3 小涌谷温泉の源泉分布。2015(平成 27)年現在。



写真 7 高温のために水と蒸気が混合して湧出する源泉。温泉の温度は 98℃もあります。

表 1 小涌谷温泉の平均値。

2007(平成 19)～2008(平成 20)年の調査による 21 源泉の平均値です。

項目	平均値
温度(℃)	62.8
揚湯量(L/min)	83.
pH	8.2
電気伝導度(μS/cm)	1867.
ナトリウムイオン(mg/L)	338.
カルシウムイオン(mg/L)	38.1
塩化物イオン(mg/L)	468.
硫酸イオン(mg/L)	93.8
炭酸水素イオン(mg/L)	140.
マケイ酸(mg/L)	176.
マホリ酸(mg/L)	23.3
成分総計(mg/L)	1307.

熱水に含まれる食塩がもとになっています。そして、この熱水が蛇骨川下流部の底倉温泉や宮ノ下温泉の源にもなっていると考えられています。もう少し詳しく説明すると、箱根火山の地下深くにあるマグマから分離して小涌谷付近を上昇してきた熱水から高温で高濃度のナトリウム―塩化物泉が形成されて小涌谷温泉ができます。この温泉が強羅潜在

カルデラ構造の東端に当たる蛇骨川下流側に向かって流動して地下水などと混合することによって底倉温泉や、宮ノ下温泉の温泉水ができていくというわけです。

今回は、小涌谷温泉について簡単に紹介しました。次回は、二ノ平温泉について紹介します。楽しみに。